

はじめに

わたしが「黒人意識」に興味を持ったのは、「黒人意識」とその指導者であるスティーブ・ビコ思想に、どこか共感する所があったからである。それは、「黒人意識」が黒人に対してアパルトヘイトの現状を直視させその状況の中にいる自分と状況との関係を考えて、根本的には「自分とはどういった存在であり、何のために生きているのか、どう生きようとしているのか」を黒人自身に問うているその問いが、黒人ではない人にも、わたしにも共有することができる問いであり、またそのような問いかけをわたし自身が持っていたからだろう。それと同時に、ビコの黒人としての自信や誇りをうらやましいと感じたし、わたしも自分に自信が持ちたい、誇れるような自分になりたいと思った。

## 第一章 アパルトヘイトとは何か

1652年、オランダ人の最初の移民がケープタウンに到達した。その後イギリスもケープへの移民を進め、19世紀には、トランスヴァール、オレンジ自由国、ケープ、ナタールの四つの植民地が存在した。その後、ダイヤモンドと金が発見されるとローズらの指導で大量のイギリス人が南アフリカに入り、1899年、イギリス支配からの自由を求めるボーア人と大英帝国の勢力拡大を図るイギリス人との間にアングロ・ボーア戦争が起きた。1902年イギリスが勝利して戦争が終わった後、南アフリカを統一しようとする動きが起き、1910年に四つの植民地から成る南アフリカ連邦が結成された。

南アフリカ連邦の成立後、鉱業労働力を確保する必要から本格的な人種差別の制度化がはじめられた。1913年に原住民土地法、鉱業労働法が制定され、それから数年後アフリカ人のための分離された政治制度が発足した。1948年の総選挙では、30万の貧困白人救済のためにアパルトヘイトに積極的な国民党が勝利し、それからというもの以下のようなアパルトヘイト法が次々と制定された。

人口登録法：すべての南アフリカの人々を、人種集団別に分類する統治制度。

雑婚法：白人と他人種との婚姻を違法とする。（1985年に廃止）

集団地域法：人種集団ごとに、所有され占有されることができる土地区画が決められている。

ホームランド政策：アフリカ人をホームランドに押し込め外国人にしてしまう。

パス法：「治安維持」のために、アフリカ人に身分証明書の携帯を義務づける。

教育：教育制度は人種別に別れており、人種によって予算や教師の充実に差がある。

職種制限法：特定の人種集団が一定の職種に就くことを制限する。

## 第二章 黒人意識とSASO（南アフリカ学生機構）

1960年3月21日、パス法に反対する1万5000人の黒人による平和的デモ行進に警察が無差別に発砲し69名が射殺された（シャープビル事件）。この事件に続いて出された非常事態宣言によって、これまでの解放運動をリードして来たANCやPACの指導者たちも含めて何千もの人が逮捕され、さらに非合法団体法の制定によって、ANC、PACは禁止された。このような政府の弾圧によって60年代の解放運動は鎮圧状態となった。

アフリカ人の民族運動が弾圧を受けたので、その後の解放運動は白人リベラルが主導のものとなった。NUSAS（南アフリカ学生連盟）は、50年以上の伝統をもつ組織だったが、白人系大学に基盤をおき、反アパルトヘイトを唱えながらも黒人キャンパスへ積極的に働きかけようとせず、主役とも言える黒人学生が参加し指導的地位に就くことを不可能にしていた。そのため、黒人学生の間では黒人のための黒人主導の全国的代表組織を求める動きが起こり、メンバーを黒人に限定したSASOが結成され、ビコが初代議長に選出された。多くの黒人学生は初め、SASOは人種隔離に対して順応主義的組織だという懸念を表明し、非人種主義を掲げる白人リベラルの中からは、SASOは好戦主義への転換の兆候だ、と言う声も上がっていた。しかし、SASOは、NUSASを含めた自分たちの社会の、白人がリーダーシップをとることが当然と考えられており、解決すべき諸問題は白人社会への影響の大きいものが優先されるという状況から脱却し、物事を自分たちのために、すべてを自分たちの力で行うことを目指していたのである。

## 第三章 黒人意識とは

黒人意識は、SASO結成の背景にあったような、白人リベラルへの不信感と、黒人自身の手で状況を変えなければ、と言う思いが原動力になっている。白人リベラルはアパルトヘイトを撤廃するために、「非人種主義」を最終目標として掲げ、その目標を達成する

手段としても、白人、黒人双方からの歩み寄りによる人種統合を強く要求している。しかし、人種の統合体を形成する人々は、優等コンプレックス、劣等コンプレックスを内面化したままで、隔離されたさまざまな社会から引き抜かれてくる人々であり、こうしたコンプレックスは『非人種主義的』な統合体組織においてさえ現れ続ける（NUSASのように）。この場合の人種統合とは、白人の価値体系を黒人が受容しその中に同化することであり、白人と黒人のそれぞれのコンプレックスはそのままのこることになる。劣等コンプレックスに苦しんでいる限り、黒人は、人間が自分自身のための人間にはかならないような正常な社会をともに建設していくものとしては、無能である。黒人意識は、内省過程によって、抑圧に甘んじている現在の黒人の状況を見据え、本来の誇れる姿を取り戻そうとする。そうして自己意識が成立するならば、黒人は抑圧状態のままにあることはもう望まず、自己を奴隷状態から解放し思い描く自己に到達するために、体制を崩し、完全に変革するための力を生むことができるのである。

黒人が誇りを取り戻すために、1652年以来の白人文明との戦いにおける度重なる敗北の歴史として示されている黒人の歴史を書き換える必要がある。また文化についても、黒人文化を「遅れた」文化と決めつけた、植民地主義、帝国主義のイデオロギーを自分自身の頭の中から追い出さなければならない。正しい歴史と文化を知ることによって黒人は民族として団結することができる。

黒人の解放のためには、意識改革と同時に経済的に自立することも重要である。黒人意識系の、黒人共同体プログラム（BPC）は皮革製品の家内工業会社「ンジェワカ工房」を創設したり、黒人共同体に治療と予防の両面から必要不可欠な医療サービスを提供する「ザネンピロ共同体診療所」を設立して共同体としての自立を目指している。

#### 第四章 黒人意識と解放の理論

抑圧者と被抑圧者の関係を成り立たせているのが、命令である。命令される状態に慣れてしまった人間は、命令されなくても命令者の意識にあわせた態度、行動をとるようになってしまう。被抑圧者は自分自身であると同時に、抑圧者のイメージを内面化していることによって抑圧者である、「二重の存在」なのである。被抑圧者がこのような「二重の存在」であるとき、彼はもはや自分のための存在ではなく、抑圧者のための存在である。自分のための存在でなくなった者は、物でしかない。この、人間の物化（非人間化）が、抑圧—

被抑圧の関係である。黒人意識は、物的な関係によって非人間化された人々に、人間的な生き方、人間性を取り戻させることに関わってくる。実践的な解放運動は、指導者が民衆との「対話」によってその活動を進めるときに成り立つ。「対話」とは、世界を決定又は変革するための人間と人間との出会いであり、対話者同士の省察と行動をそこで一つに結び付けようとする試みである。そしてそれは、世界と自己を意識している人間同士の出会いなのだから、ある者が他者の省察を奪うような関係になってはならない。

黒人意識は対話的な行動理論に基づいている。征服者は人間を物化し、反対話によって抑圧を維持し続けるが、黒人意識の理論には、革命の大義のために民衆を征服するといった余地はない。対話は強制や操作とは無縁であり、だから指導者には、彼らへの同意と支持を獲得することが要求される。しかし、抑圧－被抑圧の関係にある両者が、主体的な人間同士の交流を持つことはできない。ここに、解放の指導者が被抑圧者の側である黒人でなければならない理由がある。黒人意識の指導者たちは被抑圧者である黒人であり、被支配者層の中から現れ、その中で活動する人々であるから、反対話によって被抑圧者を非人間化（物化）することはないし、白人リベラルのように被抑圧者のために活動するのではなく、自分を含んだわれわれのためにともに闘おうとする人々であるから、彼らは同士である民衆に対して対話的であることに常に重きを置いている。このことが「黒人意識」を黒人の内に呼び戻し、その後の解放運動の主体を増加させ、解放闘争の有効性を高めたのである。

おわりに

黒人が意識化する以前の解放闘争は、指導部の反政府運動や武力闘争であったために政府によって懐柔されたり民衆の内部からの告発もあったりして、政府によって強引につぶされてしまった。しかし、意識化した民衆を巻き込んだ解放闘争において、団結した黒人社会に政府勢力が踏み込むことは容易ではなくなった。意識化によって民衆との連帯を得た解放闘争は確実に力をつけたし、黒人意識によって育った若者の多くはANCやPACに加わったり、UDF（統一民主戦線）の活動家となったりして、解放への重要な戦力となったのである。